月羽根の少女

～妖精狩り～

1

「よ、妖精？」
「うむ、妖精だ」
動揺を隠しきれずに目を丸くするさおりに向かって、クラスメイトの萩野浩一（はぎのこういち）が重々しい口調でうなずいてみせた。
もっとも、浩一の外見はいかにも今風の茶髪ロン毛の中学生である。芝居がかった重厚な仕草は、あまり似合ってはいない。
場所は、白岩学園中等部の社会科教室。放課後は新聞部の部室として使われている。今日は、新聞部の編集会議の日だった。
会議とはいってもそこには三人しかいない。部長の萩野浩一と、その従妹で二年生の未森美乃莉（みもりみのり）、そして月城（つきたち）さおり。幽霊部員は他にも何人かいるが、常に部活に顔を出すのはこの三人と、今日は風邪で休んでいるもう一人くらいのものだ。
『少数精鋭』が浩一のモットーだった。ただし浩一はともかく、美乃莉やさおりが『精鋭』と呼べるかどうかは難しいところだ。美乃莉は単に従兄にくっついてきただけともいえるし、さおりは本来文芸部なのに「文章を書くのが上手いから」という理由で強引に引っ張り込まれたに過ぎない。浩一と同じクラスだったのが不幸ともいえる。
「と、ゆーわけで次号の特集は、最近噂になっている『満月の夜に現われる妖精』の謎に迫る！でいこうと思う」
「う、噂？」
それは初耳だった。噂になっているだなんて。
「はーい、お兄ちゃん」
隣に座っていた美乃莉が手を上げる。
「私は、天使って聞きましたけどぉ？」
「ああ、そういう証言もあるな」
実の妹同然に可愛がっているという従妹の意見に、浩一はうなずいた。
「て、天使？」
「なにしろ目撃証言のほとんどが『満月をバックに、純白の翼を広げて夜空を舞う女の子』だからな。妖精か天使か、これだけでは判断はつけられ

ん」
「天使って本来、キリスト教の概念では中性なのでは？」
「細かいことは気にするな。ヨーロッパではどうか知らんが、この日本において天使といえば、その九割以上が女の子だぞ。マンガでもアニメでもゲームでも、その点は共通だ」
「いや、そーゆー基準で考えるのはどうかと思うけど」
　この浩一という男、いつもながら強引かつ自分勝手な論理で話を進めていく。慣れているとはいえ、やっぱり呆れずにはいられない。
「なにより、女の子と考えた方が楽しいだろ？」
「それは萩野が男だからでしょ。あたしにしてみたら、天使が男だろうと女だろうと……」
「はいはーい！　天使は女の子の方が、可愛くていいと思いまーす」
　美乃莉がまた、手を上げて発言する。
「だってさおり先輩、マッチョでアニキな天使って、ヤだと思いません？」
「……それは……ちょっとイヤね」
　危うく、その姿を思い浮かべてしまうところだった。想像力が豊かなのもこんな時には困る。
「ま、今回はその心配はないな。妖精か天使かは置いておくとして、その噂の対象Ｘの容姿についての証言は、人間でいえば十代前半くらいの美少女ということで一致している」
「美少女？　やだなぁ、そんな、それは褒めすぎ……」
　つい照れてしまったさおりの言葉に、浩一が怪訝そうな表情を浮かべた。
「なんで、そこでお前が謙遜するんだ？」
「え？　あ、いやっ、なんでもない」
　マヌケな失言に気づいて、慌てて首を振る。
　実際のところ、その『妖精』の正体について、心当たりはありすぎるほどにあった。
　他でもない、さおり本人である。
　実は、さおりの背中には翼が生えているのだ。
　どうしてなのか、その理由は本人も知らない。
　普段は影も形もないその翼は、満月の前後数日

間だけ、さおりの意志で姿を現すのだ。
そのことに気づいたのは昨年の六月、ちょうど一年くらい前のことだった。知っているのはただ一人、偶然に羽根を目撃されたクラスメイトの神山徹（かみやまとおる）だけ。母親でさえ知らない秘密だった。
もちろん翼は、単なる飾りではない。翼が持つべき能力を備えている。空を飛ぶことは、さおりにとってはすごく気持ちのいいことだった。
しかし、毎月恒例の夜空の散歩を楽しむ姿を、どうやら誰かに見られていたらしい。噂にまでなっていたとは知らなかった。
周囲に人がいないことには十分に注意していたはずだが、考えてみれば明るい月夜に高度数十メートルというところを舞っているのだ。しかも翼は真珠色の光沢をまとった純白。気をつけていれば、かなり離れたところからでも見えるに違いない。
「で、だ。ちょうど明後日の土曜日が満月だから取材に行くぞ。明日と、明後日の夜。場所は目撃情報が一番多い、奏珠別（そうしゅべつ）公園の展望台」
「いや、でも、あの……」
「なにか不満か？」
「よ、妖精とか天使とか……そんな非科学的なこと、実際にあるわけないじゃない。そんなものを新聞部で真面目に調べるの？」
非科学的だろうと非現実的だろうと、『翼の生えた少女』はここに実在するのだが。しかし「いない」ことにしておいた方が、さおりにとっては都合がいい。
「去年の三年生が企画した『奏珠別川の淵に潜む、謎の巨大怪獣を追う！』よりはマシだと思うが」
「五十歩百歩というか、ドングリの背比べというか……」
「目くそ鼻くそというのが、一番近いですよねぇ」
「美乃莉ちゃん。女の子がそんな言葉使わないの」
「とにかく、複数の目撃証言があるんだ。『なにか』を見たのは事実だろう。ま、常識的な解釈をすれば、このあたりにはいない珍しい大形の鳥が

迷い込んできたとか。それならそれで記事になるからいいんだ」
「それでいいの？」
「なんであれ、スクープをものにすれば新聞部の評価も上がる。来期の予算は倍増だな。新しいデジカメでも買うか」
「予算倍増はいいんだけど、その頃にはあたしたち、高等部だよ？」
「……」
さりげない指摘に、浩一が黙り込んだ。腕を組んで、難しい顔をしている。
これはおそらく「そこまで考えていなかった」ということだろう。自分のミスを素直に認めるのが嫌なので、深刻ぶった表情をしているのだ。
「……とにかく、明日の夜だぞ。以上、解散」
強引に話を打ち切って、浩一は立ち上がった。

＊　＊　＊

学校を出ると、空はもう暗くなりはじめていた。
「それじゃお兄ちゃん、頑張ってね」
笑顔で大きく手を振る美乃莉に、浩一が軽く手を上げて応える。三人の中で彼女だけ、帰り道が別方向だ。
浩一とさおりの通学路は途中まで一緒なので、そのまま並んで歩き出した。
「頑張ってねって、なんのこと？」
ふと疑問に思って訊いてみた。さよならの挨拶にしてはちょっと不自然だ。
「……ん……ああ」
浩一が答えるまでに、一瞬の間があった。
「明日の取材のことだろ」
「頑張ってって、美乃莉ちゃんは来ないの？」
「あいつの家、夜の外出とかにはうるさいんだよ。ま、中学生の女の子だから当然だけどな」
「で、あたしはいいわけ？」
「ひょっとして、月城も都合悪いか？」
「ううん、別に」
さおりの母親は、娘の夜間外出には寛容だった。ただ「気をつけなさいよ」「あまり遅くならない

ようにね」と、当たり前のことを親の義務として口にするだけだ。
だからこそ、これまで気軽に月夜の空中散歩を楽しんでいられたのだ。こんなことがなければ、明日の夜だって出かけるつもりだった。
とはいえ、浩一はそんな事情は知らないはずだ。なのにさおりが夜の取材に参加できるかどうかを事前に確認しなかったというのは、夜遊びが激しいように見られているのか、それともそもそも女の子扱いされていないのか。
後者のような気がしなくもないが、いずれにしても面白くはない。さおりはほんの少し、頬を膨らませた。
「ちょっと、下見していかないか？」
不意に浩一が言う。
「え？」
「明日の下見、さ」
「ああ」
その時二人が歩いていたのは、奏珠別公園の前の道だった。明日の夜に来る予定の展望台はこの公園の奥、奏珠別の街を囲む山へ続く登山道の途中にある。
「ん、いいよ」
さおりはうなずいた。今夜の食事当番は母親だから、少しくらい寄り道しても構わない。
公園を横切って、森の中を通る急な上り坂を数百メートル。そろそろ息が切れてきた頃、展望台に着いた。
ここも小さな公園になっていて、ベンチや、ジュースの自動販売機、子供の遊具などが置かれている。まだ完全に暗くなってはいなかったが、公園の水銀灯が灯りはじめていた。
二人の他に、人の気配はなかった。下の公園であれば、夏の夜は花火をしている子供や、ベンチでいちゃついているアベックがいるけれど、ここに来るまでの急な上り坂が災いしてか、展望台はいつ来てもあまり人気がない。街の夜景を見下ろすことができるし、いちゃつくには下よりもいい雰囲気だと思うのだけれど。
さおりは、公園の柵に手をついて空を見上げた。

雲ひとつない空は、まだ、黒というよりも濃い群青色で、東の空では明るい星がいくつか瞬いていた。

そして。

山の陰から、丸い月が顔を出している。

真円には、ちょっとだけ足りない月。満月は今週の土曜日、明後日の夜だ。

さおりは目を閉じた。

全身に、月の光を浴びているのを感じる。

さおりにとって月光は、春の暖かな陽射しと同じくらいに気持ちいいものだった。

背中がむずむずする。

いつもならここで大きく羽根を広げるところだけれど、今夜はそれができない。

浩一が一緒にいるから。

これが秘密を知っている徹であれば、なにも気にしなくてよかったのに。

こんなに月のきれいな夜に、思う存分空を飛べないのは残念だった。

「今のところ、何の異常もなし……か」

柵に寄りかかって、浩一がつまらなそうにつぶやいた。

さおりはくすっと笑った。そりゃあそうだろう。噂の正体は羽根を隠してここにいるのだから。

「天使やら妖精やら珍鳥やらが、そんな簡単に出てくるはずないでしょ」

「ま、今日は単なる下見だからな。本番は明日の夜からさ」

事情を知っているだけに、少々気の毒ではある。明日と明後日、浩一はここでなんの収穫もない夜を過ごすことになるのだ。

それに付き合う自分も暇人ではあるが、これで浩一を一人にしてしまっては、あまりにも可哀想だ。

それとも……

写真くらい、撮らせてあげてもいいだろうか。

例えば、顔がわからないくらいうんと離れていれば。

なんとか翼が認識できる程度の写真が撮れれば、それだけで十分に記事になるだろう。

いいや、やっぱりだめだ。
浩一が望遠レンズ付きのカメラを持っていたら危険だし、校内新聞に写真が載って今以上の騒ぎになったら、本当に空中散歩を楽しめなくなってしまう。
やっぱり、浩一には無駄足を踏んでもらうしかない。
「月城、ジュースでもおごってやろうか？」
不意に、浩一が言った。近くにあった自動販売機に向かって歩いていく。
「え？」
「なにがいい？」
チャリンチャリンと小銭を入れながら訊いてくる。
「え、えっと……なにか、冷たい炭酸系」
六月の下旬ということで気温はそれなりに上がっているし、ここまでの登り道で汗もかいている。よく冷えた、清涼感のあるものが欲しい。
「冷たい炭酸系、ねぇ。温かい炭酸系ってのは見たことないけど」
「う……」
確かにその通り。指摘されて、自分の日本語のおかしさに気がついた。
「じゃ、じゃあ、よく冷えた炭酸系。……って言えばいいんでしょ！」
「間違いじゃあない。が、自販機の中にあるものを、どれが冷えてるかなんて知る術はないな」
「もぉ、萩野ってば屁理屈ばっかり！」
「新聞記者たるもの、正しい日本語を心がけようって話さ」
浩一は笑いながら缶を差し出してくる。反射的に受け取ったさおりは、それがダイエットコークであることに気づいて微妙に傷ついた。
「あ、あたし、ダイエットが必要に見えるかなぁ？　ショック……」
思わず、ウェストに手をやってしまう。自分ではむしろ細身な方だと思っていたけれど、そう油断しているうちに太ってしまったのだろうか。
「別に、そうは思わないけどな。だけどクラスの女子とか、夏が近くなるとダイエットダイエッ

トって念仏みたいに唱えてるじゃん。男にしてみたら、体重なんかどうだっていいのにな」
「どうでもいいの？」
それは意外な意見だった。男の子だって、スタイルのいい女の子の方が好きだと思っていたのに。
「だって『体重が軽い』イコール『スタイルがいい』ってわけじゃないだろ。大切なのは、数字よりも見た目と触り心地。体重が軽くたって、脂肪ばかりでぶよぶよじゃダメじゃん。ある程度は筋肉のある引き締まった身体の方が、体重は重くなるけど外見はカッコイイだろ」
「う……まあ、それはそうね」
同じ重量であれば、筋肉は脂肪よりもずっと体積が小さい。体重が同じでも、筋肉質な人と脂肪の多い人では、見た目の体型はまるで違ってくる。
数字の上では痩せているさおりも、体重に占める筋肉と脂肪の比率についてはあまり自信がなかった。さりげなく、ウェストや二の腕に触れてみる。大丈夫。今のところまだ、余分な脂肪はついていない。

そんなさおりの様子を見て、浩一が意地の悪い笑みを浮かべた。
「月城なんか、もっと脂肪をつけた方がいいんじゃないか？」
「え？　そ、そうかな？」
「そうそう。特に、胸のあたりを中心に」
「っな、なに言ってンのよっ！」
思わず、両手で胸を隠した。
正直な話、さおりの胸はあまり発育のいい方ではない。最近、自分でも少し気になっていることだ。
胸がふくらみ始めたのも、初めてブラジャーを着けたのも、小学校高学年の時。クラスの女子の大半とほぼ同時期だ。しかし最近一年間の発育は、周囲に大きく後れをとっているような気がしてならない。
全体に小柄で華奢な体格だから……と自分に言い聞かせているが、大人っぽい体型のクラスメイトが眩しく感じるのも事実だった。
「……やっぱり男の子って、胸の大きな女の子が

好きなのかなぁ？」
　だとしたらさおりは、あまり男子にモテるタイプではないということになってしまう。それは嬉しいことではない。
　ことさら人気者になりたいわけではないが、まったくモテないよりは、ある程度モテた方がいいに決まっている。一応、今のところ一人だけは「好きだ」と言ってくれる男の子はいるのだけれど。
「胸が大きい方が好きか、小さい方が好きか……男にとっては永遠のテーマだな。……統計を取れば大きい方が優勢だとは思うが」
　真面目な表情で浩一が論評する。
「う……やっぱし？」
　さおりは肩を落としてベンチに座った。隣に浩一が腰を下ろす。
「だけど、まあ、胸がないくらいでそんなに悲観することはないぞ。好みなんて人それぞれだし。……俺はどっちかと言えば、やや小ぶりで形のいい方が好きだな」
「なんだかなぁ」
　思わずため息が出る。
「まったく……男の子って、いつもそんなことばかり考えてるの？」
「いつもじゃないが、そんなことは考える。月城は、そーゆーの嫌いか？」
「あんまり、好きじゃないかも」
「潔癖性なんだな、月城は」
「そう……かなぁ」
　実際のところ、よくわからない。
　まだ中学生の身としては、エッチなこととか、全然現実味のある話とは思えなかった。女の子向けの雑誌にもそういった記事は載っているし、クラスメイトの中にはもう経験ずみの子もいるのは知っているけれど、自分のこととしてはまるで実感が持てない。
「月城って、好きな奴とかいねーの？」
「えっ？」
　不意打ちの質問に、心臓が大きく脈打った。
「え、えっと……どうなんだろう？」

脳裏に一瞬、徹の顔が浮かんだ。
徹には告白されているし、決して嫌いじゃない……というか、正直に言って好きだけれど、それが本当に恋愛感情なのかどうか、自分でもよくわかっていないのだ。
趣味の合う仲のいい友達と、恋人と。その境界はどこにあるのだろう。
それに……。
徹の顔と同時にもう一つ浮かんだ顔があって、それが女の人だったりした場合は、本当にどうしていいものやら。
どうにも答えようがなくて、さおりはそのまま黙り込んだ。
間を持たせるために、手の中のコーラの缶に口をつける。
隣では浩一が、缶コーヒーを喉に流し込んでいた。先刻の質問に対する答えを待っているようには見えない。あるいは、どうでもいいような雑談だったのかもしれない。
浩一が、空になった缶を放り投げる。放物線を描いた缶は、ゴミ箱の縁に当たって地面に落ちると、さおりの足元に転がってきた。
さおりは缶を拾って立ち上がる。浩一のような無精はせずに、ちゃんとゴミ箱のところまで歩いていって自分の缶と一緒に捨てた。
そして、空を見上げる。月夜に空を見がちになるのは、もう習慣だった。
綺麗な、丸い月。
見つめていると、魂が吸い込まれていくようにすら思える。
昔の人は、月の光には魔力があると考えていた。
それは、さおりにとっては事実だった。
また、背中がむずむずしてくる。
意識を集中して、翼が顕われそうになるのを堪える。
だんだん、堪えるのが辛くなってきていた。いつも、この場所を夜空の散歩の出発点にしていたから、条件反射なのかもしれない。
「月城、なんか顔が赤くないか？」
立ち上がった浩一が傍に来る。

「……トイレなら向こうにあるぞ？」
「な、なに言ってんのよ。そんなんじゃないわよ！」
さおりはいっそう真っ赤になって叫んだ。我慢しているのはトイレではない。が、他人の目には同じように見えたかもしれない。
「じゃあ、熱でもあるのか？」
「ひゃっ！」
いきなり額に手を当てられて、びっくりした。思わず、大きく後ろに飛び退いた。
心臓がばくばくと脈打っている。胸を押さえた手が、ぴくぴくと震えていた。
男の子に触れられたから……というのもあるけれど、それ以上に、触れられてびっくりした拍子に、羽根が飛び出しそうになったのだ。
本当に、危ないところだった。
「そんなに驚かなくてもいいだろ」
浩一が苦笑している。
「別に、襲おうっていうんじゃないんだから」
「わ、わかってるよ」

別に、そんなことを思ったのではない。だけどこのままでは、本当にいつ羽根の秘密を見られてしまうかわからない。あまり長居しない方がよさそうだった。
「それより、さ。そろそろ帰ろ？　遅くなるよ」
「……なんか、警戒してる？」
浩一の表情が、微妙に変化する。
「いや、今のは悪かったよ。あんなに驚くと思わなくて」
「え？　う、ううん、そんなんじゃないの」
ぶんぶんと首を振る。
気にしているのはそんなことではない。ある意味、事はもっと重大だ。
正直、もう自信がなかった。いったいいつまで、羽根を隠していられるものか。
取り返しのつかないことにならないうちに、帰った方がいい。
「じゃ、帰るか」
浩一が素直に歩き出したので、さおりも並んで歩き出す。

「……明日の夜は、来れるんだよな？」
「え？　う……うん、一応……」
困ったことになった、と思った。
はたして、秘密は隠し通せるだろうか。
今夜でこんな調子では、十四夜の明日はもっと辛いことになりそうだ。かといって変に断ったりしたら、かえって浩一に疑念を抱かせるかもしれない。
本当に、困ったことになった。
もしもさおりの翼を目にしたら、浩一はいったいどんな反応をするだろう。
「……ねぇ、萩野は本当に、何かがいると思ってる？　本当に妖精とか天使とかだったら、どうする？」
そう訊かずにはいられなかった。
「まず、証拠写真を撮るな」
「そういう意味じゃなくて」
「さあ、な。あんまり現実味のある話じゃないから、その時にならんとなんとも言えないな。だけど……」
「だけど？」
今まで前を向いていた浩一が、不意にこちらを振り返った。
「本当にいたら、きっと、素敵だよな」
そう言って笑みを浮かべる浩一の表情に、さおりは少し鼓動が速くなるのを感じた。

「……と、いうわけなんだけど」

翌日の夕方、さおりはクラスメイトの神山徹（かみやまとおる）に電話をかけた。

さおりの秘密を知っている、このことを相談できる唯一の相手だった。学校で話していて誰かに聞かれたりしたら大変なので、家に帰ってから電話をしたのだ。

『ああ、その噂なら俺もちらっと聞いた。しかしまさか新聞部まで乗り出してきたとは……。まずいな、浩一の奴スクープとなると目の色変えるからな。万が一、羽根を見られたりしたら……』

「ど、どうしよう？」

『月城（つきたち）はどれがいい？』

「な、何が？」

『サーカスと動物園と研究所』

「神山っ！」

受話器に向かって、力いっぱい怒鳴った。冗談にしても笑えない。本人にとっては深刻な問題なのだ。

『……冗談だって。そんなに怒るなよ』

「怒るわよ！」

もう一度怒鳴る。電話なので、滲んできた涙を見られずに済んだのは幸いだった。

『悪い、無神経だった。……とにかく、今夜は俺も一緒に行くから』

「神山が？」

『月城が一人で、もし羽根を見られたら大変だろ』

「それで神山がいて、どうにかなるってわけ？」

先刻の冗談のせいで、ついきつい口調になってしまう。

『問答無用で浩一を殴り倒して、後で、夢でも見たんだろうということに』

「……そんなんでいいの？」

『よくねーけど、マジな話、他に対策なんて思いつかねーわ。とにかく、羽根を出さないように気をつけるしかないな』

「……うん」

『じゃあ……七時に、いつものセイコーマートの前で待ち合わせでいいか？』
「うん」
『それじゃ、後で。……大丈夫だって、なにも心配しなくたって』
「うん……あのね、神山」
『ん？』
「……ありがと」
小さな声でそれだけ言って、さおりは電話を切った。

＊　＊　＊

「ママ、あたしちょっと出かけてくるから」
午後六時四十五分。
さおりは、締切り前で仕事部屋にこもっている母親に声をかけて出かけようとした。
特に返事は期待していなかったのだが、扉が開いて母親のみさとが顔を出す。
「デート？」
からかうような笑みを浮かべて訊いてくる。
「そ、そんなんじゃない！　ぶ、部活よ、新聞部の取材」
「だって徹くんと一緒なんでしょ？　先刻、電話で約束してたみたいじゃない」
「それは……確かに、神山も一緒だけど」
「じゃあ、これ持って行きなさい」
「え？」
手渡されたものを見て。
二度、三度、瞬きして。
さおりは耳まで真っ赤になった。
「ま、ま、ママッ！」
避妊具の箱を、ぐしゃっと握りつぶす。
「こんなもの、いるわけないじゃない！」
「いるでしょ？　まだ中学生なんだから。万が一の事があったら大変」
「そんなこと、あるわけないじゃない！　あ、あたしと神山は、そんなんじゃないんだから！」
「なあに？　あんた達まだ、エッチはおろかキスもしてないわけ？」

みさとが呆れたように言う。
「そ、そーよ！」
正確には、キスはおろか正式に付き合ってもいない。
「だから、こんなもの必要ないの。あたしたち、まだ中学生なんだから」
「もう中学生、よ。今どきの中学生なら、最後まで経験ずみでも珍しくないだろうし。ママはね、徹くんのことは気に入ってるけれど、こーゆーことでは若い男の子は信用してないの。それに避妊さえ気をつけるなら、特に反対することでもないしね」
「と、とにかく、こんなものいらないの！」
さおりは、握りつぶした箱を床に叩きつけて家を飛び出した。
「……我が娘ながらウブねぇ」
みさとは窓辺に立って、出かけていくさおりを笑って見送っていた。

ちょこちょことした足取りの後ろ姿は、まだまだ子供っぽい。
「からかうと楽しいったらありゃしない。みーちゃんの気持ちもわかるわ……と、そうか」
なにかを思いついたようにぽんと手を叩くと、みさとは机の上に置いてあった携帯電話を手に取った。

＊　＊　＊

「あ……神山。は、早かったのね」
さおりは約束の時間の五分前に待ち合わせ場所に着いたのだが、そこには既に徹の姿があった。
コンビニの前でガードレールに寄りかかるようにして、ペットボトルのスポーツドリンクを飲んでいる。
「遅れるよりはいいだろ。それより月城、なんか顔赤くない？」
「え？　べ、別に……」
出がけにあんなことを言われたせいだろうか。

徹の顔をまともに見るのが少し恥ずかしかった。
徹は、さおりに対して恋愛感情を抱いている。一年くらい前に告白されたものの、いろいろあってその返事は保留のまま。
友達以上、恋人未満。周りから見たら、じれったいような付き合いが続いている。
手をつないだことはあるが、キスさえもしたことがない。イイ雰囲気になったことは何度かあるものの、その度にいろいろと邪魔が入って実現しないままだった。
（なのに、エッチなんて……ねぇ）
全然、現実味のある話ではない。
とはいえ、徹がさおりのことをそういう対象として見ていることは知っている。一緒にいる時は、そのことを意識せずにはいられない。
だから普段でも、二人きりで徹と会う時は少しドキドキしてしまう。しかも今日はあんなことがあったので、赤面するのをどうしても抑えられない。
その点では、単なるクラスメイト、そして新聞部の部長とヒラ部員というだけの関係の浩一の方が、一緒にいても気楽といえば気楽だった。
ドキドキしないようでは恋愛とは呼べないのかもしれないけれど、いつまでもこんな調子では心臓に負担がかかって仕方がない。
まあ、今夜は二人きりではない。浩一も一緒だから、気にすることはないだろう。それよりも、いつ羽根が飛び出すかとドキドキする方がよっぽど心臓に悪そうだ。
「んじゃ、そろそろ行くか？　浩一とはどこで待ち合わせてるんだ？」
「公園の、噴水の前」
「ん」
二人は並んで歩き出す。その背後から、聞き覚えのある声が追ってきた。
「お二人さん、もう夜なのに二人きりでどこ行くの？」
大人っぽい、ややハスキーな女性の声。
さおりは嬉しそうに、徹はさも嫌そうに。対照的な表情で同時に振り返る。数メートル後ろに、

二人よりいくつか年上の、長身の女性が立っていた。
「……あんたか」
「美里さん♪」
やっぱり対照的なふたつの声が重なる。
東野美里（ひがしのみさと）、さおりの友人の女子大生だ。
向こうは単なる友情以上の感情を抱いているらしいので、徹にとっては天敵である。さおりと二人きりでいい雰囲気になったりした時に、必ずのように現われて邪魔をするのだ。
「さおり、いつも言ってるっしょ。こんなケダモノと二人きりで、人気のない夜の公園なんか行っちゃダメだって」
美里はさおりを抱きしめて、頭を撫でながら言う。さおりがぽっと頬を赤らめたので、徹としては面白くない。
「人のことケダモノケダモノって、あんたも同類じゃないか！」
「ほーら、正体を現した。あんた「も」って言ったね？　つまり私と同じように、さおりにあーんなことやこーんなことをしたいと思ってるわけだ」
「お、思ってねーよ、そんなこと！」
「……てゆーか、美里さんはそーゆーことを思ってるわけなのね？」
さおりは思わず小声でツッコミを入れる。
「うん！」
まるで悪びれる様子もなく元気にうなずかれて、小さく肩をすくめた。
まったく。
どこまでが本気で、どこからが冗談のつもりなのか。
口ではこう言っているが、実際のところ美里が本気でさおりを襲ったことはない。抱きつかれたり頬にキスされたりはよくあることだけれど、それはあくまでも女の子同士にはありがちなスキンシップの範疇だ。
それに、さおりは知っている。
一年くらい前に美里は恋人――相手は女の子だけれど――を事故で亡くしていること。

まだ、その傷は完全に癒えたわけではないこと。
だから、さおりをからかって遊ぶことで、寂しさ、悲しさを紛らわせようとしているだけなのかもしれない。さおりと美里が出会ったのは、美里の恋人が亡くなって間もない頃のことだった。
「あのね美里さん。あたしのこと心配してくれるのは嬉しいんだけど、今夜はそーゆーんじゃないの。学校の新聞部で取材に行くことになって、それに神山も付き合ってくれているだけなの」
「取材？　こんな時間に？　いったい何の？」
「えっと……」
簡単に事情を説明する。だいたいは昨日の部活で浩一が言った通りのことだ。美里はさおりの秘密を知らないから、あまり詳しいことは話せない。
「ああ、満月の妖精の話？　私も友達から聞いた。ふーん、中等部でも噂になってるんだ」
「あぅ……」
さおりは小さく呻いた。
美里までがこの話を知っているとは。どうやら思っていた以上に、噂は広まっているらしい。

空を飛ぶ時は十分に気をつけていたつもりだったが、そんなにあちこちで目撃されていたのだろうか。
「妖精探しねぇ……ふーん、面白そうじゃない。私も行くわ」
「えぇ？」
さおりは別に異存なかったのだが、徹が心底嫌そうな顔をする。
「いいでしょ、別に。第一、中学生が保護者なしで夜遊びしちゃいけません」
徹はまだ口の中でぶつぶつ言っていたが、そんなことにはお構いなし。美里はさおりの肩を抱くようにして歩き出した。

＊　＊　＊

先に来ていた浩一は、不思議そうにこちらを見た。
「なんで、お前がいるんだ？」
徹に向かって言う。

「お前らって、やっぱり付き合ってんの？　最近、仲いいよな」
「え？」
さおりと徹は、ちらりと目を見合わせた。さおりの頬がかすかに赤くなる。
「えっと、いや、別に……付き合ってるってわけじゃ……」
告白はされているけれど。
徹のことはけっこう好きだけれど。
まだ『恋人』と呼べる関係ではない。
「それに……東野先輩？」
浩一にしてみれば、こちらは徹以上に意外な顔ぶれかもしれない。
「ああ。私は、さおりの恋人だから」
さおりに背後から抱きついて、美里が笑う。
「えぇっ！　マジで？」
「う、ウソよっ！　そんなんじゃないんだからっ！」
浩一が本気に受け取りそうな雰囲気だったので、慌てて否定する。

長身で美人の美里は、白岩学園内ではけっこうな有名人で、同性愛者であることもそれなりに知られているらしい。それだけに、先刻の台詞は冗談に聞こえない。
「そーかー。神山と仲よさそうな割に『恋人』って雰囲気じゃないと思ったら、そうだったのか……」
「納得しないでよ！」
さおりは真っ赤になって叫んだ。
確かに美里このことは好きだ。ただしそれは恋愛感情ではなくて、あくまでも友達として、先輩として。
ふざけているようでも、いざという時には頼りになる人。
これで、隙を見せるとキスしてくる癖さえなければ……と、心の中で思った。嫌ではないんだけど、癖になりそうで怖い。
美里のことは好きだけれど、恋愛の相手はやっぱり男の子の方がいいかな、と思うさおりだった。

四人揃ったところで、展望台へと移動することになった。
ちょうど山の陰から十四日の月が昇ったところで、公園の遊具や周囲の森が、ぼんやりと照らし出されている。
さおりたち以外に人影はない。噂になっているというので見物人が大勢いるかと思っていたのだが、暇人はそれほど多くはないらしい。さおりにとっては好都合だ。
しんと静まりかえっている夜の公園。まだ、虫が鳴く季節でもない。
遠くから、蛙の合唱が響いてくる。
風はほとんどなくて、気温は暑すぎず涼しすぎず、気持ちのいい夜だ。
空を見上げる。
雲はほとんどないが、まだ夕陽の残照がわずかに残っている上に月が明るいので、星の数はそれほど多くはない。
浩一が、バッグの中からビデオカメラを取りだした。しかし今のところ、特に撮るべきものはなさそうだ。退屈なのか、さおりにレンズを向けたりしている。
さおりはさりげなく、樹の陰になる位置に移動した。月光を直接浴びているよりはいくらか安全だ。
「背中、大丈夫か？」
美里や浩一には聞こえないように、徹が小声で訊いてくる。さおりはこくんとうなずいた。
「なんとか、ね」
先刻から、背中がむずむずしている。毛虫でも這っているような感触だ。
くすぐったいような、くしゃみが出そうで出ないような、そんなもどかしさ。
それでも、こうして月が見えない位置にいればなんとかなりそうだ。
本当にきついのは、満月である明日の夜だろう。羽根の衝動は、満月の夜にもっとも強くなる。
今夜なにも起こらなかったということで、浩一が諦めてくれればいいのだが、あまり期待はでき

ない。長い付き合いだから、そのあたりの性格は把握している。
案の定、真夜中まで粘った浩一は、解散時に「じゃあ、また明日」と言ってさおりをがっかりさせた。

＊　＊　＊

さおりを家まで送っていった後、天敵の美里と一緒に歩かねばならないというのは、徹にとってはかなりの苦痛だった。
とはいえ、帰り道が同じ方向なのだから仕方がない。徹と美里の家は、さおりの家よりもずっと近所だ。
徹は、ずっと無言で歩いていた。こちらから話しかけることなどないし、美里も黙っている。
別に一緒に帰る必要もないのだが、さおりの要望だからきかないわけにはいかない。「美里さんだって一応女の人なんだから、送っていってあげて」と頼まれては断れなかった。
しかし実際のところ、ボディガードなど不要だと思う。美里は女子としては長身だし、実戦空手で知られた極闘流（きょくとうりゅう）の黒帯だそうだ。喧嘩となれば、徹よりもよほど強いだろう。
だから、ただ黙って歩いていって、家の前で別れるだけ。それだけのつもりだった。
しかし、
「がっかりしてる？」
別れ際になって、美里の方から話しかけてきた。
「な、何が？」
「せっかくのデートに邪魔が入って」
「……わかってんなら、邪魔すんなよな」
悪気がないならともかく、確信犯だからたちが悪い。
「そーゆーわけにはいかない。さおりのためだから」
美里は意地の悪い笑みを浮かべた。
「考えたことある？　どうしていまだに、正式にお付き合いＯＫの返事をもらえないのか」
「あ、あんたには関係ないだろ」

痛いところをつかれて、徹はたじろいだ。美里が小さく肩をすくめる。
「気づいてないっしょ？　さおりに、男性恐怖症の気があるって」
「え？」
一瞬、言われたことの意味がわからなかった。何度か目を瞬く。
「あの子ってさ、男に慣れてないんだよね。生まれる前から父親がいなかったでしょ？　そして一人っ子。これまで、クラスメイトよりも近い距離に男がいたことがないんだよ。最近になって初めて、単なるクラスメイトではない男の子が現われて戸惑ってんの」
「それは……」
言われてみれば、そうかもしれない。さおりはそれほど人見知りをするタイプではないはずだが、それにしてはクラスの男子と言葉を交わす回数は少ない。徹や浩一は数少ない例外で、顔は可愛いのに男子の間であまり目立たないのはそのためだ。
しかし、美里に言われるまでそんなことは考えもしなかった。
「だから、本気でさおりのことが好きなら、絶対に焦っちゃだめってこと。うんと時間をかけて、繊細なガラス細工でも扱うように、そぅっとね。強引な押しの戦法は、さおりには逆効果だから」
「で、なんでいきなりそんなことを言い出すんだ？」
今夜に限って、恋敵にアドバイスするような真似を。
これまで美里には散々ひどい目に遭わされてきただけに、不審感が先に立つ。
「私はね、さおりを守りたいの。あの子のことが、なによりも大切だから」
「あんたって……その、マジでレズなのか？　マジで月城を狙ってるのか？」
「以前、私に同性の恋人がいたことは事実。さおりについては……難しいな。ただ、私が今こうして生きているのは、あの子のためだから」
「え？」
「さおりから聞いてない？」

徹は首を左右に振った。
美里がさおりと知り合ったのは、徹と親しくなった少し後のはずだが、詳しい経緯などは聞いたことがない。
「さおりと出会ったのは、恋人を事故で亡くした直後だったの。その頃の私は、……無意識に、死んだ彼女の後を追おうとしてたんだと思う。それを止めたのがさおりなの。あの子の泣き顔を見たくないから、あの子を泣かせたくないから、こうして生きているの。あの子のおかげで、生きているのも楽しいと思えるようになってきた。だから……」
美里は、真っ直ぐに徹の顔を見た。
鋭い視線が突き刺さる。
「誰であろうと、あの子を泣かすことは許さない。あの子を守るために、私は生きてる。で、今のところ、さおりを泣かす可能性が一番高そうなのがあんただから、釘を刺しておこうと思ってね」
「お、俺だって！」
徹は大きな声で言った。
「月城を泣かせるようなことはしない！　もう二度とそんなことはしないって、誓ったんだ！」
「でも、あんたは男だからねぇ。下半身が先走ることもあるっしょ？」
冗談めかした台詞だが、美里の目は笑っていなかった。
「そ、そんなこと……」
絶対にない、とは言い切れないところが辛い。前科持ちはこんな時に立場が弱い。
「ライバルの登場であんたが焦って、また馬鹿な行動に出るんじゃないかって。それが心配なわけ」
「ライバルって、今さらそんな……」
今頃になって何を言うのだろう。美里がさおりと知り合ってからもうじき一年。その存在にやきもきしている徹だって、今さら焦ったりはしない。
「なんだ、気づいてないんだ。あんた、けっこう鈍いんだね」
馬鹿にしたような笑いが癪に障る。
「なにがだよ？」

「あの萩野って奴、あいつもさおりのこと狙ってるよ。見ててわかんなかった？」
「えぇっ？」
意外な台詞に、思わず大きな声を上げた。
「気づかなかった？　私たちがさおりについてきたのを見た時の、がっかりしたような表情」
固まった徹の肩を、美里が小突く。
「自惚れるんじゃないよ、さおりの魅力に気づいているのが自分だけなんて」
笑いながら家へ入っていく美里の後ろ姿を、徹は固まったまま見送っていた。

「さおり、また出かけるの？」
土曜の夜、出かけようとしたところで母親に声をかけられた。
「中学生のくせに、毎晩男の子と夜遊びなんてねぇ」
また、いつものようにからかわれる。
「よ、夜遊びって……そんなんじゃないって言ってるっしょ！　それに美里さんも一緒だもん」
「あんまり遅くならないようにね。気をつけなさいよ」
「わかってる！」
これ以上からかわれてはたまらない。おざなりな返事をしながら急いで玄関を出る。
「……今夜は特に、ね」
小さくつぶやいたみさとの声は、急いでいるさおりの耳には届かなかった。

＊　＊　＊

昨日と同じ場所で徹と待ち合わせて。
やっぱり美里も来ていて。
浩一と合流して、四人で展望台へと向かった。なぜか徹が浩一のことを睨んでいるようにも見えたが、さおりは特に気にとめなかった。
土曜日のせいか、さおりたち以外にもいくつかの人影がある。噂を聞いて見物に来た人たちだろうか。やっぱり世の中、けっこう暇人がいるようだ。
今夜は満月。
昨夜に比べると風があって、雲が少し出てきているけれど、月の周りはまだ綺麗に晴れている。
明るい月光が降りそそいでいた。
背中がむずむずする。
満月のせいだろうか。その感覚は昨夜よりもさらに強い。
さおりはみんなから少し離れて、樹の陰になる位置に立った。今夜、月光の下にいることは危険だった。

そして、残念でもある。せっかくの素敵な月夜に、思う存分翔ぶことができないなんて。
小さく溜息をつく。
そんなさおりの耳に、かすかな金属音が届いた。
キィ……キィ……
錆びた金属がこすれ合う音。ブランコの音のようだ。
こんな時刻に、誰がブランコで遊んでいるのだろう。何気なく、音のする方へと歩いていった。
キィ……キィ……
音が、だんだん近づいてくる。
水銀灯の青白い光の下、小学校高学年くらいの女の子がブランコを揺らしているのが見えた。
茶色がかった短い髪の、ややボーイッシュな雰囲気の女の子。目が大きくて、活発そうで、なかなか可愛らしい子だ。
一瞬、女の子と目が合った。こちら見て、にこっと笑う。反射的にさおりも笑みを返した。
ブランコの揺れが、だんだん大きくなってくる。
見ている方がはらはらするくらいに大きくブランコを揺らし、一番高く上がったところで女の子の身体が空中に飛び出した。
「――っ！」
危ないっ――思わず悲鳴を上げそうになる。
しかしさおりはその声を呑み込んだ。
驚きのあまり、声が出なかった。
女の子の背後に、純白の翼が広がっていたから。
月明かりを浴びて真珠色に輝く、大きな翼。
翼を広げた女の子は、さおりの前にふわりと音もなく着地した。
驚愕に目を見開く。
「あ、あ、あなた……」
女の子は、悪戯な笑みを浮かべてこちらを見つめている。
その時、不意に理解した。
最近の『妖精』の噂の主は、さおりではなくてこの子なのだ、と。さおりはいつも、周囲に人の目がないか十分に気をつけていた。噂になるほど頻繁に目撃されていたとは考えにくい。
「ふふっ」

突然、女の子が回れ右して走り出した。考えるよりも先に身体が動き、さおりも後に続く。
女の子の後を追って、公園の背後に広がる森の中へと入っていった。

＊　＊　＊

「あれ、さおりは？」
美里に訊かれて、徹はきょろきょろと周囲を見回した。
「……あれ？」
いつの間にか、さおりの姿が見当たらない。つい先刻まで、すぐ傍にいたはずなのに。
浩一も気づいたのか、怪訝そうな表情を浮かべている。
ひょっとして、翼が現われそうになって慌てて隠れたのだろうか。そんなことを考えた徹の耳に、かすかな音が聞こえてきた。
キィ……キィ……
錆びた金属のこすれ合う音。
音が聞こえてくる方向を見る。
少し離れたところで、無人のブランコが揺れていた。たった今まで、誰かが遊んでいたかのように。
その光景に、奇妙な既視感を覚える。
ぞくり……。
えもいわれぬ寒気がした。腕に鳥肌が立つ。
「月城は……森の中だ」
徹はつぶやく。なぜか、そう感じた。
空を見上げる。
もうずいぶんと高くまで昇った月が、煌々と輝いている。
「急いで連れ戻さないと。手分けして捜そう」
それだけ言うと、徹は走り出していた。
詳しく事情を説明している時間も惜しかったし、どう説明すればいいのかもわからなかった。

＊　＊　＊

女の子は、森の樹々の間を器用にすり抜けて飛

んでいた。
走っていては追いつけない速度だ。さおりも翼を広げて後を追っている。
いったい何者なのだろう、あの女の子は。
さおりと同じ、翼を持つ者。
一年前、さおりを捜していた徹が出会ったという少女だろうか。
話を聞きたかった。
この翼はいったいなんなのか。
自分たちは何者なのか。
きっと、あの子は知っている――そう思った。
月明かりに照らされた巨木の森の中を、二人は縫うように飛んでいく。
いつしか周囲は、見慣れた奏珠別（そうしゅべつ）の山の景色ではなくなっていた。
日本では見ることのできない、常緑樹の巨木。
不自然なほどに大きな羊歯。
月明かりの下で淡い燐光を放つ花。
いずれも、さおりが住む街には存在しないものだ。

どのくらい飛んでいたのだろう。森の中にぽっかりと開いた空き地に、女の子は着地した。
翼をたたんで、促すようにこちらを振り返る。
さおりも、少し離れたところに降り立った。
柔らかな草を踏む感触。
森の樹々と青草の香り、そして降りそそぐ月光が心地よい。
空気が違う。
普段いる場所とは、なにかが根本的に違う場所。
どういうわけか、いつものように翼をしまうことができなかった。さおりは邪魔にならないように、少女を真似て背中側に翼をたたんだ。
一歩、距離を詰める。
女の子はにこっと微笑んだ。
「おかえりなさい、サオリ」
「え……？」
驚いて、その場に立ち止まった。見知らぬ相手にいきなり自分の名前を呼ばれるというのは、心穏やかなことではない。
「あ、あたしを知ってるの？　あなた……誰？」

「アタシ？　アタシの名前はティル。サオリの仲間だよ」
「仲間……？」
そう。
確かに仲間だ。
同じ、翼を持つ者。
さおりが出会った、たった一人の『仲間』だった。
「サオリのことを、迎えに行ったの。サオリがいるべき場所はこっちだから」
子供っぽい無邪気な笑顔で、ティルと名乗った少女は言った。
一瞬、さおりの身体が強張った。
「……な、なに、それ？　あ……あたしの家は、あたしの住んでいた街は、奏珠別よ」
「人間の街は、人間だけが住む場所……そうでしょ？　人間以外の存在にとっては、あれほど居心地の悪い場所はないもん」
「あ、あたしは人間よ」
「自分でも信じちゃいないくせに」
「――っ」
ショックだった。
きっぱりと言い切られるのは、やっぱりショックだった。
自分でもわかっていたこと。
最初からわかっていて、だけど考えないようにしていたこと。
アタシハ　ニンゲンデハナイ――
わかっていた。
だけど、考えたくなかった。
唯一そのことを知っている徹が触れないのをいいことに、考えないようにしてきた問題。
認めるのは嫌だった。
認めてしまえば、もう戻れない。普通の女の子として生きてきた十数年間が、すべて壊れてしまうような気がしていた。
「でも……だけど。これまでずっと、あの街で暮らしてきたんだもの。大切な友達だっているもん」
さおりは言った。

声が、震えていた。
「人間の心なんて移ろいやすいもの。サオリの秘密を知ったら、周りの人間たちはどう思うかしら」
「す、少なくとも神山は気にしていない。この羽根を好きだと言ってくれてるもん」
それだけが、拠り所だった。
それだけを支えに、この一年間を過ごしてきたのだ。
もしも、初めて翼を見た時の徹がさおりのことを拒絶していたら、そのまま奏珠別の街で暮らすことはできなかっただろう。
「本当かなぁ」
ティルが小馬鹿にしたような口調になる。
「サオリの父親みたいな人間もいるよ。むしろあの世界じゃ、その方が多数派でしょ」
「――っ！」
それは、あまりにも予想外の台詞だった。
「あ……あたしのパパのこと、知ってるの？」
さおりだって知らない。生まれる前に母親と離婚した父親のことなんて。
家には写真すらなかった。ひょっとしたらみさとは持っているのかもしれないが、さおりは見たことがない。母親の方からなにも言わない以上、こちらからは訊きにくい話題でもある。
「知ってるよ。サオリの母親を化物呼ばわりして逃げていった男でしょ」
「……」
さおりは、なにも言えなかった。
どうしてこの少女は、そんなことを知っているのだろう。
父親のことも、母親のことも。
ひとつしか考えられない。
さおりが人間ではないのなら。
それなのに父親が普通の人間なのだとしたら。
さおりの母親だって、人間であるはずがない。
人間ではない存在。
さおりが生まれ育った世界とは、少しだけ異なる場所に暮らす者。
だけど。

こちらが、本来の場所なのだ。
今いるこの場所こそが、さおりやみさとが本来いるべき場所なのだ。
さおり自身は初めて訪れる場所であっても、本能が、魂が、全身の細胞のひとつひとつがそのことを知っていた。
「さあ、行こうよ」
ティルが手を差し伸べてくる。
「みんな、待ってるよ。サオリがこっちに帰ってくるのを」
「みんなって……」
みんなって誰？
それを訊くこともなく、さおりは無意識のうちに腕を上げていた。
ティルの手を取ろうとする。
指が触れた、その時――
「月城！」
背後から、名前を呼ぶ声がした。
びくっと身体が震え、指が離れる。
反射的に、声のした方を振り返った。
「月城……」
森の樹々が途切れるところに、徹が立っていた。
ここまで走ってきたのか、全身汗だくだ。
そういえば一年前にも、こんな姿を見たことがある。
そして……
「――っ」
さおりは息を呑んだ。
徹の斜め後ろに、美里が立っていた。真っ直ぐに、こちらを見つめていた。
「美里……さん！」
思わず、両手で口を押さえた。
今の、自分の姿を思い出した。翼を露わにしたままの、自分の姿を。
見られた。
見られてしまった。
これまで徹だけが知っていた秘密を。
さおりは視線を逸らした。美里がいったいどんな目で自分を見ているのか、直視する勇気はなかった。

草を踏む音が近づいてくる。
駆け寄ってきた徹は、ティルとさおりの間に立ちふさがった。
「おい、お前！　月城をどこへ連れて行くつもりだよ？」
荒い息をしながら、怒った声で訊く。
ティルが笑って応える。
「連れていく？　違うよ。さおりは帰るんだよ」
「月城の帰る場所は、こっちだよ」
さおりの腕を掴もうとする徹に向かって、ティルは手のひらを向けた。
一瞬の閃光。
徹の身体が、草の上に転がった。
「かっ、神山っ！」
助け起こそうとするさおりの腕を、ティルがしっかりと掴まえる。
さおりよりも華奢で小柄なのに、その力は意外なほどに強かった。
「放っておいても、怪我なんかしてないよ。手加減したもの。邪魔だから、ちょっと気絶してもらっただけ」
「でも……」
「……ふぅん」
さおりの声に、もう一つの声が重なる。
気がつくと、いつの間にか美里がすぐ近くに立っていた。さおりではなく、ティルを見つめている。
「美里……さん……」
「面白いことするじゃない？　あんた……何者か知らないけどさ」
「人間では勝てない相手。それだけわかれば十分でしょ？」
「そうね」
美里はわずかに肩をすくめた。
「私はそこで寝てる単純バカとは違うけど。ちょっと……さおりと話してもいい？」
「いいけど、早くしてよね」
「すぐ済むよ」
そう言って、美里はさおりの方に向き直った。
一歩、近づいてくる。

「さおり」
「……美里、さん」
美里は、すごく真剣な表情をしていた。あまり感情は表に出ていないが、怒っているようにも見える。
「さおり、あんたさぁ」
耳を塞ぎたかった。
聞きたくない、聞くのが怖い。
いったい、なにを言われるのか。
しかし。
ザッ！
まったく不意に、美里の脚が振り上げられた。
千切れた草が舞う。
爪先が、横にいたティルの腹にめり込んでいた。
「油断しすぎだよ、バカ」
美里が脚を下ろすと、ティルの身体はその場に崩れ落ちた。
地面についた脚をもう一度高く振り上げ、倒れたティルの背中に踵を叩きつける。
短い、くぐもった悲鳴が上がった。

「私は、手加減なんかしない。さおりを守るためなら、見ず知らずのあんたを傷つけることなんかなんでもない。……それにどうやら、怪我させても警察沙汰になる相手じゃないようだし？」
「美里さん……」
「ところで、こいつって何者？」
「力いっぱい蹴飛ばしてから訊くのもどうかと思うけど……」
「いいじゃん、さおりのためなんだから」
「あの……えっと……あ、あたしにも、よくわからないの……」
「ふぅん？　ま、いいや。さっさと戻ろう。ここはどうも、私らが長居すべき場所じゃなさそうだから」
美里はあっさりとした口調で言った。
さおりの背から生えている翼のことには触れもせず、気を失っている徹を爪先で小突いている。
「こいつは置いていきたいところだけど、そうもいかないか」
しぶしぶ、といった様子で徹を担ぎ上げ、さお

りの方へ手を伸ばす。
「さ、帰ろう？」
「あ、あの……えっと……」
どうして？
どうして美里は、なにも言わないのだろう。
翼を目の当たりにしているのに。
「あ、あのね、美里さん……その……あ、あたしの、こと……なんだけど……」
さおりの台詞は、眩い閃光によって遮られた。
美里の身体は抱えていた徹ごと吹き飛ばされ、草の上に転がる。
「美里さんっ！」
いつの間にか、ティルが身体を起こしていた。
苦しそうに呻き声を上げて立ち上がると、唇の端についた血を手で拭う。
「人間のくせに……いい気になるな」
右腕を、真っ直ぐ前に突き出した。手の中に小さな光が生まれたかと思うと、次の瞬間それは剣のような形に伸びていった。
「殺してやる！」
まだいくぶんふらつく足取りで、美里の方へと歩いていく。
「だめっ！　やめて！」
さおりは慌てて、ティルの前に立って両腕を広げた。
「……どきなよ」
「いや！」
ティルはさおりを睨みつけ、剣を鼻先に突きつける。
足が震えたけれど、さおりはその場を動かなかった。
「どけ！」
「いや！　絶対にどかない！」
「サオリ、あんたも痛い目に遭いたいの？」
冷たい目をしたティルが言う。
「……それでも、どかない」
「そう、だったら……」
ティルが、剣を持っていない方の手を上げた。
さおりに触れようとしたその時。
「こら、子供が遊んでていい時間じゃないわよ」

突然割り込んできた声。二人はほとんど同時に、声が聞こえてきた方に顔を向けた。
さおりが息を呑む。
いつの間に現われたのか、一人の女性が立っていた。美里よりもずっと年上の、大人の女性だ。
その女性は、少しさおりに似た面影を持っていた。
ティルが、緊張した面持ちで唇を噛んでいる。
「……ママ」
さおりはなんとか、それだけの言葉を絞り出した。驚きのあまり、他の言葉が出てこない。
そこにいたのは月城みさと、紛れもないさおりの母親だった。
「さおり、何時だと思ってるの。さっさと帰りなさい」
「いや、あの……ママ？」
この状況下で、いつもと同じ母親の口調。それだけに戸惑ってしまう。
普段となにも変わらない態度と、初めて見る母親の姿。

みさとの背には――大きな翼が広がっていた。
「ママ……」
真珠色の光沢をまとった、美しい翼。
身長の違いのためだろうか、ティルやさおりの翼よりもひとまわり大きく、力強さが感じられる。
そしてもう一つ、ティルやさおりとは大きな違いがあった。
二人の翼が純白であるのに対し、みさとのそれは深紅の羽根が混じって、縞模様を描いている。どこか血の色にも似て、さおりは本能的な禍々しさを覚えた。
「ティル……だっけ？　人の娘を勝手に誘惑しないの」
みさとはかすかな笑みを浮かべて言った。
「まったく、高嶺（こうりょう）のジジイどもも図々しいわね。彩羽の私を追放したくせに、娘が純羽だと知ったら、手のひらを返して連れ戻そうとするんだから」
「……ママ？」
さおりは首を傾げた。

いったい、なんの話をしているのだろう。
漠然とわかるような気もするが、さおりを無視して話しているのでさっぱり詳細が見えてこない。
「高嶺の……いや、純羽の歴史は、もう終わっているのよ。こうして彩羽の子まで攫っていっても、高嶺は人口を維持できていない。自分たちの時代はとっくに終わっているのに、いつまでも過去の栄光にしがみついて、みっともないったらありゃしない」
「う、うるさい！　あんたなんか、彩羽のくせに……高嶺は永遠の存在だよ！」
ティルが叫ぶ。ひどく取り乱した様子で。
みさとはふっと小さな笑いを漏らした。
「さおり、ちょっと離れてなさい」
わけもわからずに、さおりはその言葉に従った。震える脚をなんとか動かして、数歩後ろに下る。
ティルはその場に立ったまま、みさとを睨みつけていた。
「ねえ、どうして高嶺の民が彩羽を忌み嫌うか、知ってる？」
美里が片手を上げる。その手の中に、ティルが手にしているのと同じような光の剣が現われた。
しかしその剣が放つ光は、ティルのものよりもずっと眩い。
「彩羽はね……純羽よりもはるかに強い力を持つのよ」
次の一瞬の動きは、さおりの目には見えなかった。
ただ、目も開けていられないほどの眩い光が爆発したように感じただけだ。
数秒後、涙を潤ませながら目を開けると、ティルが草の上に倒れていて、その前にみさとが立っていた。
「……ママ？」
「大丈夫、怪我なんかさせてないわよ。ちょっと気を失ってるだけ。子供相手に本気になるはずないでしょ？」
小さなティルの身体を片手で抱え上げる。そしてもう一方の手で、近くに倒れていた徹も。
「さおりはみーちゃんを連れてきて。これ以上遅

くならないうちに帰るわよ」
「えっと、いや、……あの」
「なぁに？　徹くんを運ぶ方がいいの？」
「いや、そういうんじゃなくて」
いったい何がどうなっているのか、全然わからない。
さおりを蚊帳の外に置いて、話が進んでいるような気がする。
しかし、さおりとしても早く家に帰りたかった。ここの空気はとても心地よいけれど、それでもここにはいたくない。
自分が帰るべきところは、ここじゃない。
さおりは、倒れている美里の身体に腕を回して翼を広げた。
翼がその力を発揮し、自分の身体と、抱えている美里の身体が、重さを感じないほどに軽くなる。
軽く地面を蹴ると、二人の身体は宙に浮いた。
一足先に舞い上がった母親の後を追って、森の樹々の梢よりも高く上昇する。
西の空に傾きはじめた満月が、翼を広げた二人を照らしていた。
「ねぇ、ママ？」
並んで飛びながら、みさとに声をかける。
詳しい話を聞きたかった。
いったい、この翼はなんなのか。
ティルは、そしてなによりみさとは、いったい何者なのか。
先刻のみさとの台詞に出てきた高嶺とか彩羽という言葉は、いったい何を意味しているのか。
全部、知りたかった。知らなければならなかった。
これは、自分自身のことでもあるのだ。いつまでも、目を逸らしたままでいいはずがない。
母親の顔がこちらを向く。
「……ごめん。今は話したくないわ。いつか、ちゃんと話すから」
みさとは寂しそうな、そして悲しそうな表情をしていた。母親のこんな顔を見るのは初めてだった。
だから、それ以上なにも訊けなくなってしまっ

た。
　いろいろと、辛いことや悲しいこともあったのだろうとは推測できる。そのすべてを「昔話」として娘に語るには、まだ新しすぎる記憶もあるのかもしれない。
「それより、さおり？」
　さおりが口をつぐむと、今度はみさとの方から話題を変えてきた。
「……あなた、自分の父親に会ってみたい？」

4

翌日の日曜日は、雨だった。
朝から降り続いていた雨は、夜にはかなり激しい降りになっていた。
雨の中、さおりは重い足取りで歩いていた。
先刻まで、父親と会っていたのだ。

昨夜遅く、みさとが電話で連絡を取って、急遽今日会うことが決まった。
生まれてから一度も会ったことのない父親だが、みさとはちゃんと連絡先を把握していたらしい。
みさとはついてこなかった。「あの人は私のこと怖がっているから」と笑っていたが、どこまで本当なのかはわからない。
初めて会う父親は、ごく普通の人間だった。高級そうなスーツをきちんと着こなして、待ち合わせのレストランに現れたその男性は、実際の歳は四十前後のはずだが、外見はもう少し若く見えた。
まあまあ、ハンサムだと思った。
さおりに対してやや戸惑いがちの笑みを浮かべて「初めまして」と言った時の第一印象は、悪いものではなかった。
それに対して自分がどんな挨拶を返したのか、ひどく緊張していたので思い出せない。
ただ、さおりに対して恐怖感や嫌悪感を抱いている様子は感じられなかった。それどころか「こんな可愛い娘を持つチャンスを失くしたのは残念だな」などと言って笑っていた。
そして、みさとと出会って結婚した当時の話を、少しだけしてくれた。
みさとはずっと、自分の素性を隠していたのだという。
ちょっとした不注意から秘密がばれたのは、二人が結婚してみさとの妊娠が判明した後のこと。
父親がその時どれほどショックを受けたのかは想像するしかないが、とにかく彼は、そのままみさとを捨てて逃げ出したらしい。
自分の秘密を隠していた母親。それを知って逃

げ出した父親。どちらが悪いのか、さおりには判断がつけられなかった。
さおりが父親と一緒にいたのは、一時間ちょっとのことだったろうか。レストランで食事した後、西の台の地下鉄駅まで送ってくれて、そこから家までのタクシー代をくれた。歩いてもそれほど時間のかかる距離ではないし、まだバスもある時間だったのだけど。
そこまで親切にしてくれながら家の前までは送ろうとしなかったことが、少し心に引っ掛かった。どうやら父親は、みさとに会うのを嫌がっていたのではないだろうか。もっとはっきり言えば、みさとのことを恐れていたようにすら思える。
そこで、ふと、昨夜のみさとやティルの姿を思い出した。
剣を手にした、戦いの姿。
人間にはない、不思議な、強い力を持つ者たち。
普通の人間がすんなり受け入れられるものではないのかもしれない。
さおりはタクシーには乗らず、雨の中を歩いて帰った。
歩いて、いろいろと考えたかった。
自分のこと、母親のこと、父親のこと、そして徹や美里のこと。
父親との会話の細かいところは、ほとんど憶えていなかったが、ひとつだけはっきりと記憶に残っている言葉があった。
『君は可愛いし、こんな娘を持てたら確かに幸せだろうな。……だけど、自信がないんだ。人間ではない存在。そのことを知りながら、この先ずっと家族を愛することができるのかどうか、僕には自信がない。なにしろ家族っていうのは一生のことだからね』
そうだ。
確かにそうだ。
羽根のことを知りながらもさおりを好きだと言ってくれる徹だって、いつかは気持ちが変わるのかもしれない。
そして美里は？
そう、美里にも見られてしまったのだ。

次に会った時、美里はどんな反応を示すのだろう。そもそも、会ってくれるのだろうか。
美里も徹も昨夜は気を失ったまま、みさとが家へ送っていったらしいので、さおりは詳しいことは知らない。そういえば、はぐれてしまった浩一はどうしただろう。一緒に連れ帰ったはずのティルも、朝には姿が見えなかった。
歩きながら、さおりは何度も溜息をついた。
明日は月曜日、学校へ行くのは憂鬱だ。
空を見上げる。
昨夜のきれいな月が嘘のように、強い雨が降り続いていた。

＊　＊　＊

雨は翌日も降り続いていた。
大雨洪水警報が発令されるような天候の下、気は進まなかったがさおりは学校へ行った。
休み時間に徹が傍に来て、ぽつりと「あまり気にすんなよ」とだけ言ってくれた。
少し素っ気ないような態度だったが、それはいつものことだ。クラスメイトに冷やかされたりするのが嫌なので、お互い学校でベタベタするようなことはない。
その日は結局、短縮授業で昼前に下校することになった。学校の近くを流れる奏珠別川の水かさが、危険水位まで上がってきたからだ。
こんなことなら最初から休めばよかったかもしれない。そんなことを考えながら、さおりは一人で家路についた。
仲のいい友達も、徹も、学校からの帰り道は方向が違うし、今日は寄り道して遊びに行くような状況でもない。
雨は既にピークを過ぎているようで、空はいくぶん明るくなりはじめていた。とはいえ、まだ傘なしで歩けるほど小降りにはなっていない。
水たまりを避けながらのろのろと歩いていると、遠くから名前を呼ぶ声が聞こえた。振り返ると、こちらに駆けてくる浩一の姿が目に入った。飛沫が上がってズボンの裾が汚れてもお構いなしだ。

「どうしたの、そんなに急いで」
「いや、話があったから追いかけてきたんだ。今日は、学校じゃそんなヒマなかったしな」
「話？」
一瞬、全身の筋肉が緊張する。あまり嬉しくない話題のような気がした。
「一昨日（おととい）のことだけどさ……」
ほら、やっぱり。
「みんなとはぐれた後、いったいどうしたんだ？」
俺もよく憶えてないんだよな。記憶が曖昧で、気がついたら家にいた、って感じで」
「えっと、その……」
さて、困った。
いったい、どう答えたらよいのだろう。なんとかアドリブで切り抜けなければならないが、嘘をつくのは上手な方ではない。
「神山もなにも言ってなかったし。それにお前ら、今日はなんかよそよそしかったよな。なにかあったのか？」
「い、いや、別に……」
「さては、暗がりで二人きりになった神山が、ケダモノと化して襲ってきたのか？　そうだな？」
「な、なに考えてンの。そんなことあるわけないじゃない」
「じゃあ、ケダモノと化した東野先輩が以下同文」
「……それは、微妙にありそうな話ね」
思わずそう答えた後で、浩一と目が合って二人同時に吹き出した。
「心配してくれてありがと。……でも、別になんでもないんだ」
「そうか？　ならいいんだけど」
浩一はそこでこの話題を打ちきり、さおりと並んで歩き出した。
少し気まずかったが、帰り道が一緒だから仕方がない。浩一の家は、徹や美里よりもずっと近所だ。
街の中を流れる奏珠別川の橋を渡る。
普段はそれほど水量も多くない清流だが、今日は茶色く濁った水が渦を巻いていた。生まれてか

らずっとこの街に住んでいたさおりも、今まで見たことがないほどの増水だ。今すぐ氾濫する、というほどではないが、これ以上増水が続くようなら危ないかもしれない。

二人は橋の上で少し脚を止めて、物珍しげに濁流を眺めていた。浩一はいつも持ち歩いているカメラを取り出して、川に向かってシャッターを切っている。

「こうして見てると……なんだか、怖いね」

轟々と渦巻く濁流は、不安が渦巻くさおりの心境と重なって見えた。

「そうだな……と、なんだ、あれ」

「え？」

橋の上から身を乗り出して、浩一が指差す方向を見た。

木の枝や枯れ葉に混じって、黒っぽいゴミのようなものが流されている。それが橋の下をくぐる時、さおりはその正体に気がついた。

「大変、仔猫だよ！　このままじゃ溺れ死んじゃう！」

その台詞が終わらないうちに、浩一が走り出していた。土手の上を通って、流されていく猫を追いかける。さおりも少し遅れて後に続いた。

水流は普段よりもはるかに激しいが、それでも走れば追いつけないことはない。雨に濡れた草の中を走って靴やソックスがびしょ濡れになるが、そんなことを気にしてはいられない。

流されていく仔猫を追い越すと、浩一は川岸に打ち上げられていた二メートルほどの流木を拾った。空いている方の手で土手に生えた草に掴まり、流れに身を乗り出して腕を伸ばす。

「やった！」

遅れて追いついたさおりは、思わず飛び上がって歓喜の声を上げた。仔猫はちょうどうまい具合に、浩一が持っている木の枝の、二股に分かれたところに引っ掛かった。

「よーし、そのまま、じっとしてろよ」

浩一はゆっくりと、枝をたぐり寄せる。仔猫はただ引っ掛かっているだけだから、慎重にやらないと外れて流されてしまうかもしれない。

「よしよし、こっちだ」
仔猫を掴まえようと、浩一は手を伸ばした。小さな生物がその手の中にすっぽりと収まった瞬間。
大きな水音と、浩一の短い叫びが同時に上がった。
足元が滑って川に落ちたのだ。
そのまま流されていく。
今日の増水は、仔猫はもちろん人間にとっても危険な状態だった。服を着たまま泳げるような状況ではないし、当然、足が届くような水深でもない。
頭で考えるより先に、身体が動いていた。
次の瞬間、さおりの身体は渦巻く水面の上にあった。
翼を広げ、流れに速度を合わせて浩一に手を差し伸べる。
掴まえてしまえば、後は簡単だった。手が触れた瞬間、翼の魔力で浩一の身体も羽根のように軽くなり、簡単に水から引き上げることができた。
仔猫を抱えたままの浩一を吊り上げ、土手の上に降ろす。
咳き込みながら水を吐きだした浩一が顔を上げ、さおりと目が合った。
その目が、丸く見開かれる。
さおりの背には、翼が広げられたままだった。
「つ、月城……？」
浩一の視線は、真っ直ぐに翼に向けられている。状況が理解できずに、混乱している様子だ。
これでおしまいだ、とさおりは思った。
誤魔化しようもない。日中の明るさの中で、この至近距離ではっきりと見られてしまったのだから。
「月城……その……な、なんなんだ？」
「……」
なにも、答えられなかった。
さおりはそのまま地面を蹴ると、浩一を残してその場から飛び去った。

終章

雨の中を家まで飛んで帰ってびしょ濡れになったさおりは、そのままバスルームへと直行した。
気分は、どん底まで落ち込んでいる。
シャワーを浴びているうちに、涙が溢れてきた。
見られてしまった。
人間ではない姿を、見られてしまった。
これまでずっと、徹以外の人間には隠してきた秘密を、知られてしまった。
いったい浩一はどう思っただろう。
あの、驚愕に凍りついた表情が目に焼き付いている。
もう、隠し通すことはできない。
今まで通りの生活を続けることはできない。
浴室を出たさおりは、バスタオル一枚の姿でソファーに座ってうつむいた。
「どうしよう……どうしよう……」
唇から泣き声が漏れる。
「もう、学校にも行けない……」
クラスメイトに知られてしまったから。
学校に行けないどころか、この街にもいられなくなるだろう。
人間の街は、人間以外の存在を受け入れるほど寛容ではない。
ティルの言葉が思い出される。
「もう……友達にも会えないよ……」
「どうして？」
背後からの突然の声に、さおりは驚いて跳び上がった。身体に巻いていたバスタオルが落ちて、しかも翼まで飛び出してしまう。
美里の声だ。慌てて振り返ろうとしたところを、それよりも早く後ろから抱きしめられてしまった。
「み……美里さん……どうしてここに？」
「ちょうど、さおりがシャワーを浴びてる時に来て。みさと先生に入れてもらった」
耳元でささやかれる。唇が耳たぶをくすぐる。
美里の唇はそのままうなじへと移動して、さらに背中の方へ下りていく。
「あ……あ……、あのっ！」

「やっぱり綺麗だね。この羽根」
ちょうど肩胛骨のあたり、翼の付け根にキスされて、さおりは身体を震わせた。翼が出ている時、そこはひどく敏感になっている。
「やっ……あんっだめ！」
「ん～、可愛い声。みさと先生に教えてもらったんだ。この、翼の根元部分が感じやすいんだって？」
「やぁんっ！　どぉして？」
じたばたと暴れて、ようやく美里の腕から逃れることができた。振り返ると、美里がさも可笑しそうに笑っている。
状況が理解できなかった。美里はどうして、普段通りにこうしたスキンシップを求めてくるのだろう。いや、正確にいえば、普段よりも少し積極的だ。だけどそんなのは、さおりが予想していた反応ではない。
一昨日の夜、翼を生やしたさおりの姿を目にしているのに。
そのことをまるで当たり前のように受け入れている。
どうして？
「美里さん、もしかして……」
ひとつだけ。
ひとつだけ、考えられることがあった。
「その……まさか、知ってたの？　前から……」
「もちろん？」
拍子抜けするくらいあっさりと肯定されて、さおりはいっそう驚いた。
「ど、ど、どーして？　それにいつから？」
「今さらなに言ってるかなぁ」
呆れたような声。
「初めて会った夜。さおりは空飛んでて、倒れている私を見つけたんでしょ？」
「――っ！」
さおりは言葉を失った。
確かに美里の言う通りなのだが、まさか見られていたなんて。あの時はてっきり、気を失っていたものとばかり思っていた。
「朦朧とした頭で思ったよ。ああ、天使が迎えに

来たんだって。もちろん、最初は夢かと思ってたけど」
「けど？」
「さおりってば居眠りしている時、しょっちゅう羽根を出しっぱなしにしてる」
　笑いを堪えながら美里は言った。
「う、うそぉっ？」
「ホント」
「じゃ、じゃ、じゃあ……どうして？　どうして何も言わなかったの？」
「バレてることに気づかずに、必死に隠そうとしてるさおりの様子が可笑しいんだもの」
「そ、そーじゃなくて！　……だって、ヘンでしょ？　羽根が生えてるなんて」
「いいんじゃない？　私は、ちょっと変わった女の子の方が好きだよ」
　話がぜんぜん噛み合っていない気がする。だけど、いつものようにさおりをからかう美里の態度に、少しだけ安心した。
　理由はよくわからないけれど、急に涙が出そうになった。
　その時、不意に玄関のチャイムが鳴る。
　玄関へ向かおうとしたさおりは、今さらのように自分の格好を思い出した。シャワーを浴びた後で、服を着ていないどころか今はバスタオルすら巻いていない。
「私が出るから、さっさと服を着なさい」
　そう言って出ていった美里は、すぐに、また意味深な笑みを浮かべて戻ってきた。
「例の、新聞部長」
「え？」
　心臓が大きく脈打つ。ブラウスのボタンを留めていた手が一瞬止まった。
「追い返す？」
「……ううん、出る」
　さおりは急いで服を着終えると、大きく深呼吸した。
　今、浩一に会うのは怖い。だけど、ここで逃げてはいけないと思う。
　結果がどうなるにしろ、きちんとしておきたい。

そうするべきだ。
さおりが玄関へ行くと、大きな紙袋を持った浩一が、複雑な表情をして立っていた。何を考えているのか、どうにも読みとれない。
「あ、あの……」
「これ」
戸惑っているような、怒っているような、あるいはなにか思い悩んでいるような。そんな表情で、浩一は紙袋から取り出した荷物を差し出した。
さおりの傘と鞄だった。
雨の中に放り出していったはずなのに、汚れはきれいに拭き取られている。
「……あ、ありがとう」
躊躇いながらも、さおりは荷物を受け取った。
浩一は、もう一方の手も差し出した。
「それと、こいつ」
それは、小さな声で「にゃあ」と鳴いた。
小さな仔猫。焦げ茶色の毛はすっかり乾いていて、浩一の手の中で毛糸玉のように丸まっている。
「俺ンち、親が猫アレルギーだからさ。迷惑じゃなければ……」
「……ん」
深く考えずに、仔猫を受け取った。今後、この家で飼えるのかどうかはわからないけれど。
「そして……これ」
「え？」
二度、三度、さおりは目を瞬いた。
傘と鞄はわかる。
仔猫もまだいい。
だけどもう一つ紙袋の中から取り出したものを見て、まったくわけがわからなくなった。
それは、大きな花束だった。鮮やかな深紅の薔薇を中心とした、色とりどりの花々。
「え、えっと……」
その意味が理解できずに戸惑っていると、浩一は小さく深呼吸して言った。
「俺、月城のことが好きだ」
「……は？」
「だから、俺と付き合ってくれないか？」
「え……と……、えぇぇっ？」

数秒遅れてようやく、言われていることの意味を脳が理解した。次の瞬間、さおりは目を丸くして大声を上げていた。
「な、な、なにを言い出すのよ突然……」
「突然じゃねーよ。俺、前から月城のことが気になっていて……でもお前ってこーゆーことに鈍いから、さりげなくほのめかすくらいじゃ全然気づかねーし」
好きな女の子相手に、きっぱり「鈍い」と言うのもどうかと思うが、残念ながら反論はできない。確かに、ぜんぜん気づいていなかった。
しかし考えてみれば、文芸部のさおりを強引に新聞部に引き込んだのも浩一なのだ。あれは実は部員不足のためではなかったのかもしれないと、今さらのように思った。
「おまけに神山ってライバルもいたし……どうしようかと思ったけど、先刻のあれだろ？　これはもう運命だって思ったね。やっぱり女の子は、羽根が一番だよな」
「……は？」
「メイドもいい、ネコ耳はもっといい！　ウサ耳も捨てがたい。だけどやっぱり一番は羽根だよ、うん！　なぁ、そう思うだろ？」
「え……いや、あの……？」
羽根が生えていることの理由とか、本来いちばん重要であるはずのことはまるで無視している。
美里といい徹といい、どうしてこんな性格の人間ばかりが集まっているのだろう。それとも、さおりの感性の方が間違っているのだろうか？
どう反応したらいいのかわからずに固まっているさおりの手を握った浩一は、満面の笑みを浮かべて言った。
「俺、月城のこと大切にするから。羽根だって、毎日ブラッシングしてやるよ」
「いや……あのね？」
「それとも月城、……俺のこと嫌いか？」
「そ、そんなことはない……けど……」
「じゃあ問題はないな」
いや、問題はいろいろあると思う。そのことを口にする前に、多分いちばん大きな問題が玄関に

飛び込んできた。
「待てやコラ！」
いきなり、扉を壊しそうな勢いで飛び込んできた徹が、そのまま浩一の背中に蹴りを入れた。
「てめぇ、誰に断って月城を口説いてんだ、あァ？」
浩一の服の襟を掴み、血走った目で凄んでいる。
「少なくとも、お前に断る必要はないと思うが」
「月城は俺が先約だぞ」
「先に告白すればいいってもんじゃない。ずっと、いい返事をもらえずにいたくせに」
「……っ、てめぇっ！」
図星を指された徹が逆上する。対照的に浩一は余裕ありげな笑みを浮かべた。
「言っておくが、俺の羽根好きは神山の比ではないぞ」
「オタクな自慢してんじゃねーよ！　俺だってなぁ、月城の羽根に一目惚れしてんだからな！」
いまにも取っ組み合いになりそうな雰囲気の中にあって、さおりはただおろおろとするばかりだった。論点が妙な方向にずれていることにも気づかない。
そこへ、別な声が割り込んでくる。
「こーゆー場合はアレだよ、日本古来の決着のつけ方。それぞれがさおりの手を両方から引っ張って、先に離した方が勝ちという……」
「……日本古来っていうのは、微妙に違うと思うけど」
この状況を楽しんでいるようにしか見えない美里の態度に、さおりは小さく溜息をついた。
「だったら、男らしく決着をつけたら？　もう、雨もほとんど止んだみたいだし」
美里が拳を前に突き出して、殴るような動作をする。徹と浩一はお互いに顔を見合わせた。
「……やるか？」
「望むところだ」
「どっちが勝っても恨みっこなしだぞ」
昔の熱血少年マンガの登場人物のようなノリで、二人が玄関から出ていく。一番の当事者のはずなのに、さおり本人の意思はすっかり無視されてい

た。
取り残されたさおりの肩に、美里の手が置かれる。
「いやいや、青春だねぇ。若いっていいねー」
「いや……あの、あたし……もう、わけがわかんないんだけど」
「どっちが好き？」
からかうような口調で訊かれる。さおりは小さく首を振った。
「……わかんない」
「どっちも、嫌いじゃないんでしょ？」
「うん……まあ」
「じゃ、私らは奥でお茶でも飲んで、のんびり待ちましょ。私としては、先刻の続きをしたいかな」
美里はさおりの肩を抱いて、居間へ戻るように促した。台詞の後半は、耳元に唇を寄せてささやいてくる。
その悪戯な表情を見て、ようやく、さおりも気がついた。
「……美里さん、ですね？　神山を呼んだの」
考えてみれば、あまりにもタイミングがよすぎる。浩一が来たところで、美里が徹に電話したに違いない。
おそらく美里は、浩一の気持ちに気づいていたのだろう。この状況で二人が顔を合わせれば、喧嘩になるのは当然。その間に美里が漁夫の利を得るというわけだ。
美里の顔が近づいてくる。からかうような笑みが消えて、優しく微笑んでいる。
「みんな……さ、さおりのことが好きなんだよ。誰も、さおりを傷つけようなんて思わないから」
肩に置かれた手が、とても温かい。
「美里……さん……、あたし……あたし……」
涙が溢れてきた。
悲しいんじゃない。その反対。
みんな、いい人だ。美里も、徹も、浩一も。
自分は幸せだ、と思う。母親が経験したのとは違う未来を、期待してもいいのではないかと思ってしまう。

際限なく涙を流している顔を見られるのが急に恥ずかしくなって、腕の中の仔猫を抱きしめて顔をすり寄せた。

頬を伝う涙を、仔猫のざらざらした舌が舐めてくれる。

そして反対側の頬には、美里の柔らかな唇が押しつけられていた。

あとがき

え～と、お久しぶりです。

気がついてみると、さおりを書くのは約二年ぶりですか。

たいへん長らくお待たせしました。『月羽根の少女３　妖精狩り』をお届けします。

一応最終話です。その割には中途半端な終わり方……と思うかもしれませんが、そもそもこのシリーズは最初から、向こうの世界の詳しい説明とかはする気ありませんでしたから。

それらは、いつか機会があれば、さおりがヒロインではない別の『月羽根』シリーズで書きたいところです。なんでもアリだった『光の王国』と違い、さおり編の『月羽根』は、あくまでもウブな中学生のソフト恋愛ものと割り切ってます。

それにしても、まともな小説の更新はずいぶん間が空いてしまいましたね。更新履歴を調べてみたら、三月の『たたかう少女』以来、長いものは公開してません。（正確には、七月に『ＭＩ・ＫＵ・ＭＩ』がありますけど）

これだけ間が空いてしまったのは、『ふれ・ちせ』開設以来初めてかもしれません。これもすべて、ラグナロクが悪いんです。今だってラグナのサーバにつながらなくて、仕方なくこれを書いてるんですから（笑）。

いやまあ、ホントは他にもいろいろと事情はあるんですけど。

おかげで最近、メールの返事も滞り気味です。急ぎの返事を必要とするもの以外、ほとんどお返事できない状態になってますが、いただいた感想等はちゃんと読ませていただいてます。

今年は後半ちょっとサボりすぎてしまったので、これからはもう少し真面目に執筆を再開したいところですね。

ということで次回作品ですが、これはまだ未定。ネタはいくつもあるんですが……。

順番からいけば『一番街の魔法屋』でしょうか。

だけど未完のシリーズものは『一番街』だけなので、これを書いてしまうと「もうやるべきことはやった」と、衝動的に『ふれ・ちせ』を閉鎖してしまう可能性が高くなってしまいます。ストーリィ面でもまだちょっとしっくりこない部分があるので、もう少し熟成期間を置こうかと考えてます。

以前りりーすのーとで冒頭部分を紹介した新作は、まだまだいつ完成するかわかりません。私としては、『光』に匹敵する、あるいはそれ以上のクオリティに仕上げたいと思ってますので、じっくりと時間をかけるつもりです。

で、今のところ次回作の第一候補は、まったくの新シリーズになってます。

タイトルは『トゥス』。

本州から白岩学園(この作品では女子校という設定)に転校してきた女の子と、ちょっと不思議な力を持つ美人の先輩の、現代ファンタジー風ソフト百合もの。

今回は一挙書き下ろしではなく、『西十八丁目の魔女』のような短編連作にすることも考えてます。あと、キタハラ長編では初めての一人称作品になるかも。この辺は、書き始めてみてからどちらがしっくりくるか考えます。

短編の方は……『マリア様』の新刊がもうじき出るので、それでなにか……そういえば『パラソル』ネタもまだ書いてませんでしたっけ。

あとは『光』のカーテンコールもそろそろ書かなきゃいけませんね。次は多分、リースリング家のご先祖様の話になります。

それでは、いつになるかわかりませんけど、また新作でお会いしましょう。

二〇〇二年十二月　北原樹恒

kitsune@nifty.com
創作館ふれ・ちせ
http://hure-chise.atnifty.com/

閲覧に関する注意事項

このＰＤＦファイルは、画面での閲覧、紙への印刷の両方に適合するようにレイアウトされているため、閲覧時にはちょっとした工夫が必要です。

●モニタ上での閲覧

モニタ上で読む場合、ブラウザやアクロバットリーダーのサイズを横長にして、ちょうど半ページが画面に収まるようにしてください。すると、Ｅｎｔｅｒキー（Ｒｅｔｕｒｎキー）で半ページずつ読み進めていくことができます。

画面解像度が高い場合（１２８０×１０２４以上）、ウィンドウサイズをできるだけ大きくして、１ページ単位で表示することもできます。その場合は、表示モードをデフォルトの「幅に合わせる」から「全体表示」に変更します。

なお、モニタ閲覧には旧タイプのレイアウトの方が適しているかもしれません。（その代わり、旧レイアウトは印刷向きではないのです）どうしても旧レイアウトで読みたいという方は、北原宛にその旨メールでお知らせください。個別に対応いたします。

●印刷しての閲覧

印刷して読む場合、用紙サイズはＢ５を使用します。

印刷実行前に、アクロバットリーダーのプリンタ設定を確認してください。

高性能のレーザープリンタを使用する場合、プリンタの「２ページ印刷」の機能を用いた方が、実際の本に近い文字サイズで読みやすいかもしれません。（縮小してＢ６用紙に印刷するのでも可）

アクロバットのバージョンが４の場合、印刷が極端に遅くなる場合がありますが、これはソフトの仕様によるものと思われますのでご了承ください。